

にげだした兵隊

原一平の戦争

竹崎有斐・作 小林与志・絵



913 たけざき ゆうひ

現代の創作児童文学 1

にげだした兵隊——原一平の戦争

竹崎有斐・作 小林与志・絵

東京 岩崎書店 1983 219 p 22cm

現代の創作児童文学 1
にげだした兵隊——原一平の戦争

一九八三年八月三十日 第一刷発行
一九八三年十一月十日 第二刷発行

著者 竹崎有斐

発行者 大川松利

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一〇九一二

〒一一二 電話八一二・九一三二

振替 東京七一九六八二二

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 株式会社若林製本工場

八三九三一一二〇〇〇一〇三六〇

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

にげだした兵隊

原一平の戦争

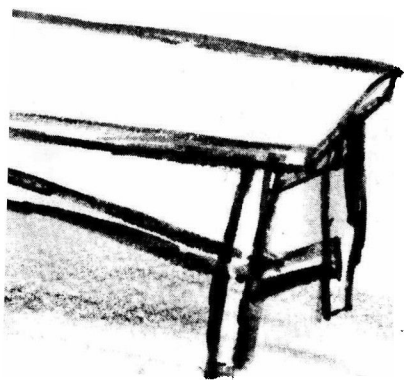
竹崎有斐・作 小林与志・絵



にげだした兵隊

—— 原一平の戦争 ——

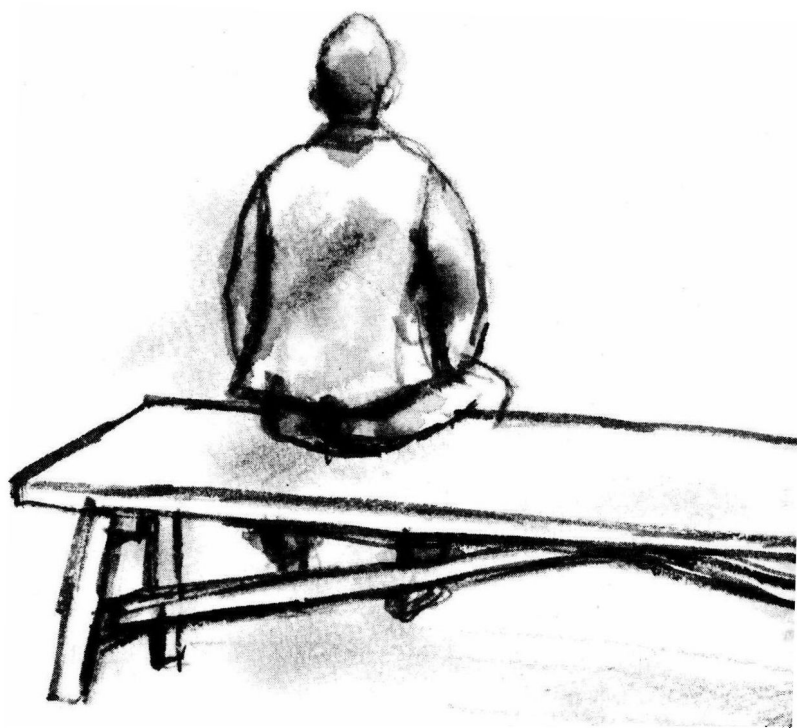
1	見おくつてくれた犬……………5
2	残飯そうどう……………19
3	幸か不幸か……………33
4	万年一等兵……………47
5	花房号と古参兵……………61
6	見習伍長……………75



7	南方派遣要員……	89
8	八年兵のお茶くみ……	103
9	四人と一びき……	116
10	一人の乗客……	129
11	頼りないやつ……	144
12	うめられた手投弾……	158
13	一本の虫ピン……	175
14	再度の虫ピン……	189
15	一発のびんた……	205
	あとがき……	218

表紙・口絵・さし絵

小林与志



1 見おくつてくれた犬



きようは一平の入隊する日である。入隊とは兵隊になることである。

昭和十八年十二月一日の午後一時、目のまえにあるこの営門をくぐったら最後、いつでてこれるかわからなくなる。たぶん、いまの戦争がおわるまでは兵隊でいなくてはならない。戦争はいつおわるかわからないから、おさきまっくらである。原一平はおなじ入隊者の群れからはなれて、剣付鉄砲の衛兵がたっている営門をぼんやり見ていた。

熊本菊池の飛行機整備隊は、見たすかぎりの野っ原のなかにあつた。娑婆ともきようかぎりおさらばだと思ふと、遠くに見えるわらぶき小屋までなつかしく見える。

いままです学校の授業で何がいかといつて、教練の時間ほどこいかなものはなかった。銃をかついで校庭を行ったりきたり、一時間もやらされると、たいていうんざりしてくる。それがこれから連日つづくのである。それも学校の教練なら、どんなにどなられても、めったに殴られることはない。だからわざとろくさやって、教官をかんかんにさせたりもしたが、軍隊はそんな生やさしいところではない。あたりまえにやっても殴りとばされるのである。

ちいさいときから一平は、向う気が強いわりには、喧嘩はきらいだった。殴られるというのが恐かったのである。といっても、殴られるのは、カッと熱くなるだけで思ったほどでもないのだが、殴られる直前の、胃がぎゅうとちぢまる、ひきつるような感じがいやだった。

いまからはたえず、この恐怖感につきまといわれることになる。それどころか、きょうをさかいとして、自分は命令されるままだうごくだけだから、これから自分が何をやるのか、どこへ行くのか、生きるのか死ぬのかさえわからなくなる。

そんなことをかんがえていたとき、一平のうしろでバンザイの声がおこった。

「見おくり、ありがとうございました。ただいまから大君の御楯となつて、戦つてまいります」

バンザイにかこまれた入隊者が、軍隊式の挙手の敬礼をして挨拶している。

きょう入隊するのは、学徒動員令で徴兵延期をうちきられた学徒兵たちである。べつに制服制帽で入隊しろとは通達になかったが、みんな黒の学生服に学帽をかぶっている。ひとりひとりの頭のなかには、一様に不安がうずまいているはずだが、見おくりの人の手前、はりきつて挨拶をして見せねばならない。

一平は人前で、この心にもない挨拶をするのが嫌やで、ひとりできたのである。ひとりで行くから見おくりにこないでくれというと、おふくろは目の色をかえた。

「これが今生の別れかもしれんもの。見おくりに行かんでは、一生心のこりになるからいやだよ」

「じょうだんじゃなか」

逃げてでも生きて帰ってくるつもりなのに、とんでもないと、一平はひとりでとびだしてきたのである。

自分は特別おくびようかもしれないと、一平は思う。それだけにおどおどと營門をはいるうしろ姿を、だれにも見られなくなかった。おくびようもののうえに、みえっぱりなのかもしれない。

「とにかく、ひとりできてよかった」

心にもない挨拶をしないですむ。でも見おくりのある連中は、家族と車座になって弁当をひらいているのがうらやましくもある。

一平は、きゆうに腹がへってきた。

「弁当でもくおうかな」

そういつて一平がふろしきの包みをほどきかけたとき、顔のそばでワンとほえた犬がいた。どこからやってきたのか、大きな犬が目の前にすわって、いっしょにたべようというように一平を見あげている。

「おい、お前もひとりできたのかい」

じいっと見つめている犬の視線に、一平はあわてていった。すると犬はこたえるように、ちいさくワンといった。

「そうかそうか。おまえもひとりぼっちで入隊か。そのほうが、おたがい気楽でよからうが」
そういつてしまってから、一平はわらった。

「そうだよな。犬には徴兵などなかもんなあ。かってに、すきなところに行けてよかたい」
じょうだんをいいながら、一平にはじょうだんではなくなってきた。

「ほんとに入隊するわけじゃなし、こんなとけ、なにしにきたとかい」

見ると首輪くびわをつけている。しかもドイツ系のポインターである。ポインターにはドイツ系とイギリス系があるが、ドイツ系のほうがずっと闘争心どうそうしんがつよい。獵犬りようけんは獲物えものをおいだすだけでいいのだが、あまりに攻撃こうげき的なため自分でしとめようとして、ぎやくにイノシシの牙きばにかかったりする。

「そうかい。おまえはご主人しゅじんの見おくりにきたつかい」
てつきりそうだと一平いつぺいは思った。

「見おくりなら、はよご主人しゅじんのとこさんいけ。一時間いっくわんもせんうち入隊にゅうたいだけん、もう頭あたまなせてもらうこともできんばい」

だが犬はいっこうに行こうとしない。一平いつぺいを見つめてしきりに首をかしげている。

「はよ行け、いかんかい」

手をふっておいだてると、犬はたちあがって尻しりごみしたが、かなしそうにクーンとないた。

「ふうん。行くのはいやか。飼い主かぬしはおらんとか。そんならここにおってもよかたい。いっしょに弁当べんどうをくうか」

さいわい、おふくろが見おくりにくるつもりで、三人分べんとうつくっていた弁当べんどうを一平いつぺいはもってきていた。草の上にあぐらをかいて、菓子箱かしばこにつめた弁当べんどうをひらいた。にぎりめしにトンカツ、昆布巻こんぶまきに煮しめに、卵たまごの厚焼あつやきなどがぎっしりつまっている。おふくろは、これが最後さいごとおもってむりしたらしい。

犬はうれしそうにしゃべをふっている。一平いつぺいはトンカツをひとときなげてやろうとして、思いなおしたように、菓子箱かしばこのふたにのせて犬の前まえにおいてやった。



9 見おくってくれた犬

「なげてやっては失礼だもんな。犬にもプライドがあるだろうけんな」

だが犬は礼儀などおかまいなく、ばくつとくわえ、ろくに噛みもせずのみこんでしまった。

「はええなあ、もつとゆっくり食え。おれとお前の別れの宴だろうが。惜別の宴では、がつがつ食うもんじゃなかぞ」

一平は自分が二くち三くちくつては、犬にひとつやった。

「そうだなあ。こうやって、犬のお前をまえにして、かってなことをいうのも気が晴れてよかもんばい」
一平がなにかいうたびに、犬はなにをいつているのかと首をかしげている。

「わかるのかい。わかってくれよ。ほんなことついうと、おれははずかしかばってん、兵隊にいくとがいやでたまらんとばい。そんなことでは戦争に勝てんし、負けるのもまたいやだが、弾のとんでくるところに行くのはやっぱり恐かもん。でも入隊をにげるわけにはいかんもんなあ」

一平はしゃべりはじめると、次からつぎにしゃべりたくなっていた。

そのとき犬が、ばつとよこにとんで、はしりだすかつこうをしてみせた。

「なんだと、いっしょに逃げろというのか。ばかたれ、そんなことのできるもんか」

犬は一平とはしりたかっただけかもしれないが、一平はどきりとした。逃げられるものなら逃げもしようが、逃げたら最後、憲兵においかけられて生涯逃げまわらねばなくなる。それより、一平は運よく整備兵にまわされたことで五〇パーセントは生きのこれる可能性をひきあてたと思っている。この五〇パーセントに賭けたほうが得策である。

「逃げるほうが分がわるかもん。あとは運を天にまかせて入隊するよ」

一年前の徴兵検査で、一平は最低クラスの第三乙であった。肋膜炎がなおったあと、がりがりにやせていたからである。でも検査のあと、希望の兵科をいわされるのだが、一平は、

「飛行兵を希望します」

といった。一番危険な飛行兵に、ほんとうになりたかったわけではないが、ほかのものがみんな、命などおしくないという顔で「飛行兵」といつているのに、自分だけが衛生兵とか憲兵とか、安全な兵種をいうわけにはいかない。それに全員が飛行兵というのだから希望などいわなかったのとおなじになる。だから一平も前のものにならって「飛行兵」といつたまでである。

だが、やってきた召集令状に「航空軍」とあるのを見て、一平はひやりとした。陸軍、海軍、空軍の航空軍である。やはり飛行機にのることになってしまったかと、一瞬思ったが、よく見ると入隊さきは整備隊となっていた。

一平はしめたと思った。整備隊はいわゆる後方部隊である。つまり最前線にはですに基地にいる部隊である。でも南方派遣にでもなればどうなるかわからないが、それでも直接戦うことはないのだから、半分はたすかったようなものである。あとは軍隊のしごきにたえられるかどうかだが、歩兵や砲兵よりくなくような気がする。

「まあ、なんとかやってくるよ」

と、一平は犬にいった。

一平はやせてはいるが、大食漢である。中学のころのあだ名は「八分目」であった。年に一回、全校生徒で鬼狩りをして校庭で兎めしを食う行事があるが、そのとき一平は二十一ぱい食ったのである。

「原一平よ、はらいっぱい食わんで、腹八分目にしとかんかい」

先生にそういわれたときから、「八分目」のあだ名がついたのである。

一平はさっきから犬をあいてに、三人分の弁当をばくついていた。もうすぐ入隊の刻限だと思ふと不安でしかたないのだが、それでも自分でおかしくなるほど食欲がある。だがだいぶ犬にやっても、三人分の弁当はさすがに食いのこしてしまった。大飯ぐいの一平のために、おふくろが特別たくさんつめておいてくれたのかもしれない。

「のこりもんでわるいが、あとしまつしてくれよ」

一平は弁当のあまりを、どかっと犬の前においた。犬はのこりものだろうとなんだだろうとおかまいなく、見るまにたいらげてしまった。

そのとき「入隊者集合」の声がかかった。

一平はたちあがり、そなえつけのドラム罐のくず物いれに、弁当のあき箱をほうりこむと、営門のほうに歩いていった。すると犬も自分の右横にびったりとついてくるのである。一平はあわてた。

「おい、犬が入隊してどうする。あっちゃいけ。はよいけ」

一平がおっぱらうと、犬はおどろいたようにはなれ、ふりかえりふりかえり、遠ざかっていった。

ひろい営庭に白線が一本ひいてある。見おくりの人はそこで待つことになる。入隊者は氏名をよばれ、

班別に整列をおえた。一平は第二班の一番うしろにならんだ。

すぐに軍服と上下の下着とフンドシ、くつ下と軍靴、戦闘帽がくばられた。ただちにまっ裸になつてきかえなければならぬ。営庭の吹きさらしのなかで、しかも見おくりの人たちの前で、まっ裸にされるとは思つてもいかなかった。

一平はボタンをはずして学生服をぬぐとき、なんともみじめな思いがした。そして、またいつ、この学生服がぎられるのかと、ふと思つた。

ぬいだ服はひとまとめに風呂敷につつんで、見おくりの人にわたすのである。見おくりのいないものは、用意してきた荷札をつけて、一か所にまとめておくようにとのことであつた。

列がくずれ、風呂敷をかかえた全員が、われさきに見おくりの人のところへかけだしていった。荷物の受けわたしはほんの数分だが、それでもみな、最後の別れをいいあっているようであつた。

「なんど別れをいってもおなじだろうに」

見おくりのいない一平は、返送先の荷札をつけて、いわれたところにおきにいった。

そのときである。さっきの犬が一目散にはしつてきて、一平がおいた風呂敷包みの前にびたりとすわつたのである。

「そうか、おまえ、どっかで見おくつてくれたのか、ありがとうよ」

一平は犬にいつて、列にもどつた。と、うしろで「こらあ、なにをする」という悲鳴にちかい声と、けたたましい犬のほえ声がおこつた。おどろいてふりむくと、れいの犬が、荷物係りの上等兵をおしたおし

て、上からのしかかっていた。

「こらっ、やめんか、やめろ」

一平は走って行って、犬の首輪をおさえ、ひきはなした。ほこりをはらってたちあがった上等兵は、かんかに怒っていた。

「ばかやろう、きさまの犬をそこでぶんなぐれ。いいというまでなぐれ」

「わたしの犬ではありまっせん」

一平は犬をおさえたままでいった。たしかに自分の犬ではないのである。

「うそをつけ。きさまの犬でないのに、なんでおさえにきた」

「それじゃ、はなします。ほんとにわたしの犬じゃなかとですから」

「まて、おさえておけ」

上等兵はにげ腰になった。でも一平も、いつまでも犬をおさえているわけにはいかない。はやく列に帰らなければならぬし、いつまでもおさえていたら、ほんとうに自分の犬だと思われてしまう。一平は犬をはなしてしまおうと思った。だがそのとき、

「班長どのお」

と、上等兵はかけだしていた。かけだしたうしろから犬をはなせば、とびかかっていくかもしれない。一平は犬がはなせなくなった。

上等兵はすぐに、班長どころか、小隊長の少尉どのまでつれて、かけもどってきた。

「なにごとだ。どうしたというのだ」

小隊長は、おちつきぶりを見せるようにゆっくりいった。

「こいつが犬をつれてきとって、自分にとびかからせたのであります」

「そんなこつはしまっせん。わたしの犬じゃなかとです」

「きさまの犬じゃなかなら、なんできさまの荷物をまもつとる。荷物をリヤカーにつもうとしたら、とびかかってきたのだぞ」

小隊長はいきりたつ上等兵と一平を、半はんに見てにやにやしていた。

「お犬さま同伴でご入隊とは、かわった新兵だな。軍隊はそんなことのゆるされるところじゃないのだぞ」
小隊長はおだやかにいったのだが、上等兵は、ますますいきおいづいた。

「学徒兵は精神がたるんどるとです。気合をいれてやります」

上等兵は、犬をおさえている一平に「たて」といった。

「まて、上杉」と、班長がとめた。

「きょう一日、新兵はお客さんあつかいだ。気合をいれちゃいかん。それにこの犬は、たしかにこの新兵の犬ではありません」

と、班長は小隊長にいった。一と月前、入隊してきてすぐ北支に転属された中尉殿がおられました、その中尉殿についてきた犬にちがいないと、班長はいってくれた。

「中尉殿がまだ隊におられると思って、部隊のまわりを毎日うろついております」